

私の独り言 明治維新を成功させた陰の力 —ある大坂豪商と京都の公家の話

大阪大学名誉教授

長谷川 晃

要旨：今回は大坂の豪商淀屋の話と岩倉具視の伝記を基に、状況証拠を積み重ねることで、江戸幕府に対するクーデターの成功と日本の近代国家建設に関わる謎を解いてみた。大坂中之島の淀屋橋を架けた淀屋は秀吉の頃から様々な事業を興し、なかでも世界で初めて先物商品（米）取引を考案するなど、世界での資本主義の先駆けとしても知られている豪商である。ところが淀屋五代目は1705年に江戸幕府により闕所（けっしょ）処分を受ける。その後、淀屋の暖簾は淀屋四代目の番頭・牧田仁右衛門によって引き継がれ、鳥取県倉吉に現れる。鳥取淀屋の牧田家はしばらくして再度大坂に出て大坂淀屋を復活させる。しかし、この両淀屋は幕末の頃の1859年に突然店をたたみ、全財産を朝廷に献上したと伝えられている。一体この財は何処に行ったのだろうか？私は当時朝廷から蟄居処分を受けた公家岩倉具視に渡り、岩倉がこの資産を用いて倒幕クーデターを成功させ、さらに明治新政府の設立に役立てたと推理する。「歴史とは歴史家が創ったものだ」と言う友人のカリフォルニア大学歴史学教授の言に基づいて、ここに新しい日本歴史を創造してみることにする。

1. はじめに

学士院賞受賞のおり、皇居で天皇ご一家の方々と食事をする機会が与えられた。この時、陛下は明治維新が成功したのは国民の識字率が極めて高かったからだとおっしゃっておられた。実際新しい民主主義政治を成功させるためには国民の識字率が基本となる。私は両陛下に「日本では平安時代から既に世界に例を見ない女性の文学者達を輩出した歴史があります」と同意のコメントをしておいた。確かに明治維新には不思議なことが多い。私には、幕末当時大きな借金を抱えた地方藩主の薩長藩が衰えたとはいえ、全国の大名を掌握していた大大名の徳川幕府を打ち破ることが出来たこと、さらに貧乏公家達による明治新政府が財政破綻を引き起こすことなく、列強による植民地化を阻止し、

新しい日本国建設を成功させるに至った経緯が不思議でならなかった。日本の歴史学者の記した明治クーデターの話には、これを成功させた財政面での記述が殆どない。私はこれに対し、幕末に店をたたんで全財産を朝廷に献上した大坂-倉吉の淀屋連合とその資産を受け継いだと思われる岩倉具視が明治維新を財政面から成功させた立役者だと考えている。今回は色んな史実を基にした状況証拠を積み重ねて組み立てた明治維新に関わる新説を披露したい。

私の新理論を理解して頂く為に、この章では先ず大坂の豪商淀屋の歴史を秀吉から家康の時代に遡って紹介する。続いて、この淀屋が五代続いた後に宝永2年（1705年）に幕府によって闕所処分を受ける話と、幕府に没収された当時の国家予算規模にのぼる淀屋の資産を紹介する。その後の淀屋が四代目重當の代の番頭牧田仁右衛門によって再興される話を紹介し、闕所処分から約150年後の幕末、安政六年（1859年）に繁栄していた大坂と倉吉の淀屋が突然店をたたんで全財産を倒幕の為に朝廷に献上した話を紹介する。

これらの史実を基に、倒幕から明治新政府樹立に至る歴史を財政面から推理する。ここではこの時期に暗躍した岩倉具視に焦点を当て、彼が淀屋の資産献上の中継ぎをしたと推定する。当時新政府から佐幕派とみなされ蟄居処分を受けていた貧乏公家の岩倉が突然頭角を現し、蟄居処分を解消され僅か3ヶ月後に倒幕を主張し王政復古の号令を発するに至った理由がこれで説明できる。更にまた岩倉は明治新政府での第十五銀行や日本鉄道会社の設立を行っており、これらの資金の出所の説明も可能になる。その上、発足当時収入が殆どなかったはずの明治新政府が財政破綻することなく輝かしい門出ができた事情も理解できる。

2. 淀屋の歴史

淀屋は後の大阪の豪商、三井・住友・鴻池などの現れる以前の徳川時代初期における大坂での唯一の豪商で、初代岡本三郎右衛門常安は秀吉の大坂城構築と武

家集団の大坂への移転に伴う材木商として頭角を現し、後の秀吉の伏見城構築や淀川の堤防改修工事を請け負うなどして富を築いた。家康の大坂城攻めでは徳川側について家康の信任を得、米商いの独占権を得る。淀屋二代目言當は米の先物取引をベースに日本中の米相場を一手に引き受ける豪商となる。先物取引を始めたのは大坂が世界で最初とされている。淀屋に関する研究は本学経済学部名誉教授の故宮本又次先生が晩年特に力を入れておられ、淀屋橋のもとには宮本先生による淀屋の碑が建てられている。



大阪淀屋橋の南西角にある淀屋の碑と屋敷跡の標

言當の頃の大坂での米の年間取引高は日本全国の米の収穫高のほぼ10パーセントに当たる200万石、当時の通貨にして200万両に上る。淀屋は各地の大名に収穫米を担保に大名貸しという金融業を始め、四代目重當の代には淀屋の資産は数百万両、また、全国大名への貸付額は当時の資料（大坂淀屋三郎右衛門密書）によると1億貫に上ったと言われている。当時の淀屋の資産を現在の円で評価する為に、江戸時代の通貨の値を調べてみよう。当時の通貨は貫目単位の銀、小判金単位の両、それに石単位の米がある。小判の両、銀の貫の値を知るには <http://www.teiocollection.com/kansan.htm> のサイトを用いると便利で、江戸時代の平均で金1両は現在の通貨で約6～10万円、銀1貫は金1両の約11倍となっている。この変換を用いると淀屋が全国大名に貸し付けていた総額の1億貫は現在の通貨で何と100兆円程度ということになる。これは現在の日本国国家予算を上回る数字である。この数字が余りにも大きい為、この密書に書かれている数字は信用できないと言う歴史学者は多い。確かにこの貸付額に関しては誇張が有りそうに思われる。ちなみに

当時の日本全国の米の収穫高はほぼ2700万石、これを担保に全国の大名が金を借りたとしても債務全額は年間で2700万両（現在の通貨でほぼ2兆円）程度にしかないからだ。しかし、何れにしても淀屋が全国大名に貸し付けた金額は莫大な額に上っていたと思われる。

当時100万石の大大名の年収は単純計算で通貨にして約100万両ということになるから、言われているように淀屋の資産が数百万両ということになると、大大名を脅かす大富豪ということになる。商人を見下す幕府がこの様な事態を放置するはずがない。賢明な淀屋四代目の重當は幕府に目を付けられていることを察し、番頭の牧田仁右衛門に暖簾分けをする。牧田は出生地である鳥取県倉吉に店を開く。倉吉では大坂淀屋の米商いの商売を引き継ぐが、後には新しい農機具、稲扱き千歯なる道具を考案し、これを全国の農家に広げて財を築くことになる。その後、牧田家は8代目の孫三郎が没する明治28年まで続く。

一方大坂淀屋では重當の死後、廣當（淀屋辰五郎）が店を継ぐ。辰五郎廣當は忠臣蔵の大石内蔵助の所業を真似てか豪遊の日々を送る。商人を見下していた江戸幕府は、淀屋の債権と資産に目を付け、宝永2年（1705年）淀屋五代目の廣當に闕所処分を申し付け財産没収、処払いの処分を下すことになる。大坂淀屋三郎右衛門密書によると、この時幕府が没収した淀屋の現金資産は金12万両（約100億円）、銀12万5千貫（約1400億円）と記されている。この額を大名の石高との比較を試みよう。1石は100升、1升はほぼ1.5キログラムだから、現在の価格で約600円、従って1石は6万円、或は江戸金貨でほぼ1両とみることができ、勘定がしやすい。百万石の大大名の年収は従って百万両、つまり、ほぼ1千億円となる。しかし実際の収穫高は表向きの石高の2～3割しかなかったと言われているから、年収は3百億円程度であったろう。実際、幕末当時の資料では石高で3位の薩摩藩（90万石）は500万両の債務を抱えていながら年収は20万両もなかったとされている。日本全体の石高は2700万石ほどだから、この例でいくと、実収入はほぼ1千万両、つまり日本全体の米による実収入は1兆円程度であったろう。従って淀屋が没収された資産の250万両が如何に大きいか分かる。いわばこれで江戸幕府の台所が大きく潤ったと考えられる。淀屋の発展と凋落の様子を近松門左衛門が浄瑠璃「淀鯉出世滝徳（たきのぼり）」に描いている。

關所処分を受けた淀屋はその後どうなったか？前述の通り、淀屋は鳥取県倉吉市において番頭牧田仁右衛門によって引き継がれて生き残ることになる。一方關所処分を受けた淀屋五代目の廣當は1718年まで生き、關所後江戸に旅し、幕府に御家復興を願い出て京都府八幡に土地を授かっている。廣當の墓所は八幡市の神応寺にある。



八幡市の曹洞宗神応寺にある淀屋一族の墓石、左から五代目廣當、三台目箇齋、二代目言當、言當の弟道雲（箇齋の父）ら。關所処分を受けた廣當の墓が一番小さい。

それでは大坂淀屋はどうなったか？ほとぼりが冷めた頃、番頭の牧田仁右衛門の五代目の四男が淀屋清兵衛を名乗り、大坂に店を出して淀屋橋を買い戻し大坂淀屋を再興している。この大坂淀屋は五代続き繁栄する。牧田家が大坂淀屋を再建した事実は偶然倉吉の大蓮寺で確認されている。牧田家の菩提寺である大蓮寺に、写真にある淀屋清兵衛の墓石が見つかったのだ。この写真にある通り、墓石の台座にははっきりと淀屋清兵衛の名に大坂の文字が刻んである。地元の方の話では昭和57年に墓石を覆っていた苔を取り除いてこの文字が出て来たとか。私もこの寺を訪れ、牧田家代々の墓を確認し、それらが全てこの清兵衛の墓石より小さいので驚いた次第だ。清兵衛が大坂で本家の倉吉淀屋より成功したのではないだろうか。

倉吉市にはこの他に1760年築の倉吉淀屋の屋敷が残っていて見学できる。

關所処分にあった大坂淀屋の1万坪の屋敷（敷地は2万坪）に比べ質素なものだが、地方の屋敷としては立派なものだ。

ここで大変興味深い話を紹介したい。それは、1705年の關所処分の約150年後の幕末の頃の安政六年（1859年）に倉吉淀屋と大坂淀屋の両家は突然店をたたみ、全財産を倒幕の為に朝廷に献上して姿を消し



倉吉市大蓮寺に現存する後期淀屋初代清兵衛の墓石



鳥取県倉吉市の淀屋の屋敷（1760年築）

ていることだ。これは淀屋の關所処分の150年後の幕府に対するリベンジと言われている。ここまでのことは分かっているがこれ以後のことは全く記録がないのでここから筆者長谷川の推理が始まる。

先ず淀屋が關所処分を受けた1705年から幕末の19世紀半ばの間にどれほどの資産を取り戻せたかを推測してみよう。後に大坂の淀屋を再興した番頭牧田仁右衛門は關所処分を予想した淀屋四代目重當から暖簾分けをしてもらって倉吉に店を出したわけだが、仁右衛門は重當と2つ違いで極めて近い主従関係にあったと言われている。ある説では、仁右衛門の娘と妻は主人

重當の娘と奥方の身代わりになって幕府に殺害されたとも言われている。これらの事情を考えると關所前の淀屋の資産の少なくとも数パーセント、或は10万両程度の支度金をもらったと見て不自然ではない。同時にまた牧田自身も徳川家に対し大きな恨みを持っていたことが伺える。牧田仁右衛門は番頭での経験を生かし、倉吉で事業を大きく展開し、鳥取池田藩に献金などを行っている。一方大坂に淀屋清兵衛の名で店を出した牧田家は淀屋の看板を生かして事業を展開したと考えられる。幕府の目があるので以前のような米相場の大商いは出来なかったであろうが、暖簾分けの資金をもとに淀屋の暖簾を使って金融業を続けたであろうと推察できる。商売は信用の上に成り立ち、暖簾はその信用の印である。当時の貸金利の相場は年利1割2分と言われているから、仮に年1割の利息で金融業を始めたとすると経費を差し引いても元金は10年でほぼ2倍、100年では1000倍近くになる。更に今と違って当時は所得税がなかったので金利収入には税金がかからない。ただ、相手が大名だと貸し倒れになる恐れがある。これが実質的な税金となっていたのだろう。しかし、元金は100年払いでもいいから利息だけ入れてくれという形で商売が出来たとすれば、四、五十年の間には利息収入が元金の10倍程度になる。従って幕末までの150年間に新しい淀屋（後期淀屋と呼ばれている）は關所以前の資産の約300万両を十分取りもどせたのではないかと想像できる。幕末に至って倒幕の為に安政の大獄の翌年の1859年に淀屋はその全財産を朝廷に献上したと言われているが、その金額は淀屋側にも朝廷側にも残されていない。しかし、上記の理由から筆者はこの金額は少なく見積もっても500万両、あるいはそれ以上と考えて無理はないと思っている。他の知られている資料を使って別の面からこの金額の妥当性を示そう。倒幕の指導者と見なされている90万石の薩摩藩は当時500万両の借金を抱えていて、この借金を強引に無利息で250年払いにするよう要求したと記録されている。貸し主の記録は見つからないが恐らく大坂商人、或は淀屋が中心であったのではないかと推測される。このことから朝廷に献上した金額を500万両と推定する筆者の推測の妥当性が示されよう。

3. 岩倉具視の出現

しかし、淀屋から献上された資産を朝廷はどのように使ったのだろうか？これに関する資料は見当たらない。

い。実際、豪商とは言え一商人が大八車に千両箱を山積みして持って来て、いきなり朝廷に「天皇はん、このお金倒幕にお使いやす」と言うわけにはいかない。中に立つ人間、公家がいたはずである。私は淀屋が資産を渡した相手は岩倉具視と睨んでいる。

この証拠を示す為に、ここで幕末に於ける岩倉具視の振る舞いを当時の歴史の流れを見ながら振り返ってみよう。岩倉具視は1825年、岩倉家と同じ中流公家の堀河家の生まれで、13才の時に岩倉家の養子となっている。幼少の頃は乱暴で公家言葉を使わなかったと言われているので、後に淀屋との交流が出来たとしても不思議ではない。中流の公家出身ではあったが鷹司政通の歌流に入り頭角を現し、当時の天皇であった孝明天皇とも和歌を通じてコンタクトができたと言われている。当時岩倉は従四位。1860年の桜田門事件の後の幕府の公武合体の要請を受けて岩倉は將軍家茂への皇女和宮の降嫁（1861年）に尽力したと言われている。しかし、翌1862年には宮中の尊王攘夷派から佐幕派とみなされ、岩倉は蟄居処分を受け洛中から追放される。その後5年間の長きにわたり、具視は岩倉村で苦しい生活を送ることになる。生活は貧困を極め娘の養育にすら事欠き、養女に出している。具視はその頃公武合体論から倒幕論に考えを変えている。私は淀屋が資産を献上したのは正にこの頃の岩倉具視と考えている。蟄居処分を受けていた岩倉に大坂商人淀屋が近づくことは容易なことであつたらう。また、資金と引き換えに淀屋が1705年の幕府の關所処分のリベンジのためとして倒幕願いを要請したのを岩倉は受け入れ、佐幕派から倒幕派に変身したのではないか。淀屋が店をたたんだのが1859年、岩倉が蟄居される3年前である。淀屋はこの間に資産の大半を占める債権、恐らく米の先物を担保にした米切符（手形）であつたらうを整理し、一部を現金化したと考えられる。淀屋が岩倉具視に目を付けたのは豪商の持つ鋭い眼力であつたらう。岩倉は以前恐らく徳川側から莫大な金子を受け取り、この数年前の1861年には嫌がる光明天皇を説得し、他に許嫁の決まっていた皇女和宮を強引に徳川家に降嫁させることに成功している。淀屋のこの判断が当たり、岩倉は薩長を利用して、たくみに倒幕を成功させただけでなく、維新後の明治政府を軌道に乗せる役割を果たすことになる。

岩倉具視は先ず淀屋資金の一部をうまく使ったのであろう。1867年11月には赦免されている。この1年前の1866年12月に孝明天皇は崩御している。一説に

は具視によって毒殺されたとも言われているが当時は未だ彼は赦免されていない。1867年1月には明治天皇が15才で即位している。岩倉が赦免されるひと月前の同年10月14日には徳川慶喜が二条城で大政奉還をしている。慶喜の大政奉還の意図は、世論に押されての大政奉還だが実際には朝廷の政治力の無力さを見込んで、徳川家の権力の温存を図ったものと考えられている。赦免のわずか2ヶ月後の1868年1月には岩倉具視は参内し、早速慶喜の処分を求め、公家を中心とする新政府案を基にした王政復古の大本営案を15才の天皇に奏上している。ここでも淀屋の資金が公家達を動かすのに使われたと推測できる。こうした経緯を知った徳川慶喜は突然薩摩征伐の名目に出兵し、鳥羽伏見の戦いが始まる。朝廷を中心とする新政府（公家達）は慌てふためき、徳川と薩摩藩の争いは私闘だから新政府は関与しないと言っていたが、新政府の議定となったばかりの岩倉具視は淀屋との約束に基づき、徳川征伐の案を出し、この案を通して。数ヶ月前まで蟄居処分を受けていた岩倉がこれほど急速に権力を持つことが出来たのは恐らく淀屋資金を巧みに使って新政府の公家達を動かしたからだと筆者は見ている。ちなみに孝明天皇の石高は3万石、つまり年収3万両で、後の公家達の石高は1万石にも満たない。もし岩倉が淀屋から500万両を受けていたとしたら新政府を自由に動かすに事欠かない。新政府が徳川方につくか薩長方につくか、それとも知らん振りをするかでは従来の公家達であれば知らん振りを選ぶはずである。これを覆して薩長方につかせるには単に新政府の公家達の票を買うだけでは出来ない。軍隊を持たない公家政府を動かすには薩長組が圧倒的な大軍を率いる徳川軍に勝つ保証が必要である。恐らくここで岩倉は淀屋からの資金の一部を薩長軍に与え、同時に頃合いを見て錦の御旗を出すという戦略を持ち出して新政府を説得したのであろう。実際鳥羽伏見の戦いに際し薩長軍は大坂の三井家に軍資金を依頼し、1万両程度の寄付金を得ている。従ってもし岩倉が淀屋の資金のほんの一部の10万両程度の軍資金を既に提供していて、薩長軍が近代兵器を備えている事実を示していたら、新政府を薩長側に立たせることの説得が出来たはずである。蟄居以前は佐幕派であった岩倉があくまでも倒幕にこだわったのは淀屋との約束があったからではないだろうか。岩倉の作戦は功を奏し、伏見での戦いでは数にして極めて劣勢の長州軍が徳川軍を打ち負かすことができ、徳川軍は慶喜の居る大坂城に向けて敗退

する。しかし、この時点でも大坂の徳川軍は圧倒的な兵力を持っており、このまま薩長軍が徳川本陣への攻撃に成功するとは考えられなかった。しかしである、この時に淀屋の出生地である淀まで退いた徳川軍に対し、薩長軍は突然、錦の御旗を振りかざして追撃したのだ。この為、突然徳川軍は天皇に歯向かう賊軍とされ、兵士は戦意を失い、同時に慶喜は江戸に逃げ帰ってしまう。つまり、劣勢の薩長軍が徳川の大軍に勝利できたのは十分な軍資金と、それにも増して、錦の御旗がモノを言ったことになる。そしてなんとそれまで誰も見たこともない錦の御旗を薩長軍に提供したのは他ならぬ岩倉具視である。こうして眺めると、徳川を滅ぼし明治政府の設立を成功させたのは淀屋の資金と岩倉具視の知能ということになり、幕末の英雄たちとされている、メッセンジャーボーイの坂本龍馬や、そこいらをうろちょろしていた浪人や下級武士ではないということが分かる。また、革命を仕掛けたのは薩長軍ではあるが、クーデターを成功に導き、新政府を打ち立てたのは淀屋の資金を得た岩倉具視である。これが私の新説である。善かれ悪しかれ岩倉具視の名前は歴史に残っているが淀屋の名前は幕末史には残っていない。金を出しても名を残さない大坂商人の根性の表れであろう。

4. 明治新政府の財政の基盤となった淀屋の資金

さて明治新政府の財政はどうだったろうか？政権返上した徳川家もクーデターを起こした薩摩・長州藩も大きな借金を抱え倒産寸前であった。例えば、前述の通り、薩摩藩の借金は500万両にもなっていたことが知られている。金を貸していたのは大坂商人達である。一方、新政府の公家達は、元々貧乏で政府を運営する資金などはない。普通クーデターで新政権が誕生する場合は、倒された側の資産が利用される。しかし、江戸城には何も資産らしいものはなかったことが知られている。

維新当初の諸藩（地方自治体）の収入は未だ年貢米であった。明治政府はこれを国有化しているが、国には所得税制すらなかったから最も金を持っている商家から合法的に資金を集める方法を持っていなかった。土地を私有化し、それに課税する地租改正令が公布されたのが明治6年の7月である。しかしこの法律は従来の年貢の方式と基本的には変らない。近代国家の台所を賄う所得税制度が出来たのは明治20年になってからである。この時点まで実質的に日本国中の富を蓄

えていた商家からの税収はなかったのだ。その一方で外圧に抗して新政府は急速に国力を持つ必要があった。一部の資金は英国などからの借金に頼っていたが、先進国が無担保に多額の貸付金を提供してくれるはずはない。私はここでも岩倉が手にしていた淀屋資金が大きな役割を果たしたと見ている。もしこれが私の推定通り500万両（恐らくそれ以上）あったとすると、日本の米の総生産量、約2700万石の価値のほぼ2割、別の見方をすると当時の日本のGDPの20%以上の金額になる。これは当時の国家予算を上回る規模であったと推測できる。私の推測では淀屋が岩倉に手渡した資産の大半は諸国の大名からの手形であったと思われる。淀屋にしてみても大名からの手形は当時の不安定な政府のもとでは不渡りにされる恐れが極めて高く、無事現金化できるかどうかの心配が大きかったろう。現に薩摩藩は500万両の債務を250年払いにするような無茶な要請をしている。淀屋が岩倉に目を付けたのは、彼が新政府に入れば、こうした大名への債務を取り立ててくれるという目論見もあったのではないか。淀屋の読み通り岩倉具視は新政府において、明治4年には右大臣、6年には太政大臣代理に就任し、この力で徐々に淀屋の債権の取り立てをし、国家の財政や個人の事業にこれを当てたのであろう。例えば明治新政府下で岩倉は華族の銀行である第十五銀行を設立し、さらにまた、今のJR東日本の土台となる私鉄「日本鉄道」を設立している。貧乏公家の岩倉に莫大な資金を要するこのような事業を立ち上げられるはずがない。淀屋の資金が岩倉具視に渡り、岩倉がこれをたくみに利用したことが事実とすると、こうしたことが全て説明できる。同時に先にあげた明治維新の成功に関する長年の私の疑問が解けることになる。クーデターを成功させ新政府を軌道に乗せるには、歴史家が言わない「お金」の問題を説明しなければなるまい。

結言

今回は、科学者の持つ推理眼を用いて、幕末から明治新政府設立に至る日本史に於ける極めて重要な、し

かもミステリアスな部分に新説を提供した。従来の歴史書には、徳川慶喜が朝廷に大政奉還をして僅か3ヶ月後に幕府が崩壊するに至った理由は詳記されていない。更にまた、クーデターを起こした薩長側も起こされた幕府側も、新政府を担った公家達も明治新政府を立ち上げる資金を持っていなかった。それにも関わらず明治新政府が成功した財政的理由も明記されていない。筆者の推理はこうした日本史の一大ミステリーに解答を与えるものである。私は大坂と鳥取の豪商淀屋の資産を預かり、これを巧みに利用した一公家岩倉具視の手腕がこれらの経緯に関わったと考えている。最後にこの文を書くにあたり、淀屋の歴史に関し淀屋研究会 <http://www.ric.hi-ho.ne.jp/yodoya-ken/> などをご紹介頂いた当学名誉教授の宮本又郎先生（宮本又次先生のご子息）に感謝する。

この文の脱稿後、筆者の所属する京都東ロータリークラブの公家会員、植松雅房氏を通じて岩倉家16世、岩倉具視の5代目の御子孫、岩倉具忠京都大学名誉教授に本稿をお送りしていたところ、ご本人から「大変興味深いので会いたい」との申し出であり、6月20日に2時間ばかりお話を伺う機会があった。

具忠氏は身内としての具視の研究結果を記した御著書『岩倉具視－「国家」と「家族」』（高等研選書21）を持参され、この中で具視の財政に関する才覚としての尾崎三良の談、「具視が秩禄公債を安く買って利益を得ていた」を示し、筆者の淀屋からの債権受け取り説を支持された。具視公は「機密文書の場合受取人に破棄させることが多かったので、当面関連文書は見当たっていないが、大阪商人との交流があったかどうかは大変興味あることなので調べてみる」と約され会談を終了した。

これを機に、日本歴史を塗り替える結果が生まれることを楽しみにしたい。

（通信 昭和32年卒 34年修士）